

学童保育指導員研修における講師活動の報告（1）

— 「いじめや虐待への対応」に関する講習（貧困、現代社会、学校の様相から） —

玉木 博章

愛知みずほ大学(非常勤講師)

Hiroaki TAMAKI

Aichi Mizuho College (Part-time lecturer)

キーワード： いじめ; 虐待; 学童保育; 貧困; 学校化社会

1、はじめに

筆者は 2015 年より学童保育指導員研修の講師を毎年務めている。内容は主に地域別で開かれる年 1～2 回の学童保育指導員学校の講師と、年数回の学童保育指導員資格取得、そしてキャリアアップに関わる講習の講師とに分けられる。本稿では 2017 年度に筆者が半

年間計 7 回という長期に亘って担当した愛知県学童保育指導員のキャリアアップ研修と岐阜県放課後児童支援員等資質向上研修での「いじめや虐待への対応」(150 分～240 分)の講師活動の内容を報告する。表 1 は 2017 年度の活動の日程記録と詳細を示したものである。地域や会場によって時間はやや異なった。

表 1 講師活動の日程と内容の詳細

日時	地域	テーマ	会場
10 月 6 日	岐阜県高山市	いじめや虐待への対応	飛騨総合庁舎
10 月 25 日	愛知県岡崎市	いじめや虐待への対応	岡崎市民会館
10 月 27 日	愛知県豊橋市	いじめや虐待への対応	総合福祉センターあいトピア
11 月 24 日	岐阜県岐阜市	いじめや虐待への対応	県シンクタンク庁舎
12 月 1 日	岐阜県美濃市	いじめや虐待への対応	中濃総合庁舎
12 月 7 日	愛知県名古屋市	いじめや虐待への対応	ウイंकあいち
1 月 16 日	愛知県名古屋市	いじめや虐待への対応	ウイंकあいち

講義は基本的に同じものをベースにして地域の特色を生かしたり、参加者の反応を見て改良したりして行った。本稿では主にいじめの対応に関する内容を報告した後、虐待児への対応に関する内容をまとめていくこととする。

現代において、いじめと虐待は増加傾向にある。ただこれは単純増加と言うよりも、悪口やネグレクトといった精神的なものも包括され、定義がより広義になったことで以前は認識されていないものが可視化されたと捉えるべきであろう。そうした状況での対応は、被害にあっている子どもを保護することは当然ながら、加害者に対して罰するだけでなく、どう二次被害や、潜在被害を食い止めていけばいいのかという視点も必要となる。つまり、生じてから対応するだけではモグ

ラ叩きでしかなく、加害者を罰して終わりでは対処療法でしかない。したがって本報告では、いじめや虐待の生じるメカニズムを明らかにしながら根本解決の一助となる予防方法をまとめていく。

2、講義内容（いじめについて）

2-1 いじめの背景を考察するために

いじめや虐待の対応をするためには、なぜそういった事象が生じるのかという原因を知り、根本的に解決していく必要がある。そのため、講義の前半ではまず現代の社会背景について報告した。

OECD 調査等の資料を示しながら、20 人のうち 3 人存在するという日本の相対的貧困率（中央値の半分以下つまり）の高さを示し、中央値と平均値の違いを説

明していった。一見すると約15%という貧困率は、中央値（半分）の半分つまり25%ずつ均等に人数がいるのであれば、むしろ低いように思う者もいるだろう。しかしながら平均値と中央値の違いを鑑みればそのような疑念も晴れる。

例えば過去5年間における日本の所得平均の具体的な金額は、およそ500万円前後から550万円未満である。実際に日本の平均所得が541万円の年の中央値は427万円であり、545万円の年の中央値は453万円になっている。このように平均値>中央値である日本社会の様相は、一部の高所得層が所得平均を上昇させている¹反面、実際には平均よりも稼いでいない低所得層が多く、貧しさが見えづらい国であることが理解できる。換言すれば、所得平均が高い割には中央値が低い日本は、多くの者が相対的貧困率の示す以上に平均的な金銭感覚を下回る生活を強いられている状態であることがわかる。

加えて、中央値の半分以下という数値が15%だけであり、実際にはその半分という数値すらない家庭も存在していること。そもそも中央値の半分を基準にした相対的貧困率の算出方法と所得平均とのズレが、日本の貧困度合いに目隠しをさせてしまっている懸念があることを補足した。

他方で、①15%前後という相対的貧困率の高さはあくまで日本全体の平均値であり、沖縄等の地域によっては30~40%になる地域も存在する点²、②制服が子ども達の貧しさを隠してしまう点²、③大阪で行われた絶対的貧困調査によると、意外にもケータイやゲーム機の保有率は貧困層の方が富裕層より高い点を加味すれば、教師や指導員の目線では表面的には子ども達はみな同じようにゲームやアニメの話題に触れて、ケータイでコミュニケーションをとっているように思える。その反面、多くの家庭が見えない貧困を抱えている日本社会の様相がわかる。そしてそうした貧困が見えづらい状況が、子ども達それぞれにとって「自分だけが恵まれていない」という思いを抱かせ、不平不満を内に溜めさせている。

また親の収入格差による学力デバインドが子ども達の自己肯定感を更に下げる。一般的に所得が高ければ「学力」と呼ばれるテストの結果は伸びる傾向にある。実際に東大生の親の年収は多くが1000万円を超えている。理由は①塾等の学校以外の教育³を受けられる点、②バイトや家事をせずに勉強だけに集中できる環境がある点、③そもそも高い教育を受けた両親の文化資本⁴を受け継ぐため、「学力」の再生産がなされる点が挙げられる。加えて、④東大生には比較的4月5月生まれが多いと言われる点⁵、⑤学力テストが国語と算数と理科のみに偏重しており、入試も含め、限られた一

部の教科や種目を効率的に反復練習した者だけが評価されるシステムを学校社会が有している点、⑥社会に出ればコミュニケーション能力が重視され、意外な才能で世界に羽ばたくこともあるにも拘らず、そうした部分を入試はもちろん学校成績では反映しない点、⑦偏差値とはゼロサムゲームであり全員が優秀な「学力」を修めることはない点を鑑みれば、学校社会とは一部の者だけが得をする不公平で不満の生じやすいシステムであり、そのことが必然的に子ども達の自己肯定感を下げることが理解できる。結果、日本における若者の自殺率は他国に比べてとても高い⁶。

そもそも②に関連して、親がホワイトカラーかブルーカラーかで学校文化に対して親和的か対抗的かを左右する。したがって小1プロブレムも家庭の教育力によるところが大きい。多くの習い事をこなしてつけられ、初めから学校社会に馴染む子どもとそうでない子どもの間では、小学校入学段階でもかなりの差がある。したがって、大きさではあるが、たまたま高所得の両親を持ち、春先に生まれた子どもは教育の先取りによって自然に学校社会で成功体験を重ねることで自己肯定感を高め、そうでない子どもは自然に失敗体験を重ねて自己肯定感を下げていく。このように、実際には個人の努力ではどうにもならない点が多いと言えよう。それにも拘らず、日本社会でも自己責任の論調は強い。翻って、そうした競争社会で成功した子ども達は独力で成長したと勘違いを起こし、昨今のような東大生や医学部生をはじめとする高学歴大学生の犯罪にも結びついている。逮捕された東大生が「自分は東大生だから何をやっても許されると思っていた。一定以下の学歴の者は人間ではない」というコメントは限られた「学力」のみを過大評価した現代社会が作り出した結果であるのかもしれない。

2-2 不満がいじめを引き起こす

このように学力という一元的価値観（個性）で計られる現代の学校社会では一部の子ども達だけが優越感を得て、多くの子ども達が不満を抱えやすい構造となっている。加えて、日本という国自体が、島国出であるせいか、国籍や障害といった標準とは異なる存在に対して排他的になりやすい一元的な価値観を有している。そうした構造は「ならばせめてみんなと同じじゃなければ」という過剰な同調意識や、消費文化への癒着を呼ぶ。学校社会で評価されるアイデンティティを持たない子どもは他の方法で自らのアイデンティティを模索し、居場所を確保しようとする。逆にそれは、みんなと同じじゃない子どもへ差別を生み、そうした子ども達を排除することによってマジョリティに属する自らの優位性を示そうとする。その結果スクールカー

ストと呼ばれる権力序列が教室に出現することになる。したがってこうした可視化されない上下関係を孕む日本の学校社会は相対的にいじめが生じやすい構造を有していると言える。不満を抱えた者は、自分よりも弱い者を攻撃することによって一時的ではあるが自らの優位性を確認し、満たされないストレスを発散させることができる。加えて勉強やスポーツなど、親からこうした序列競争での勝利を強いられたり、家庭そのものからのストレスを子どもが発散させるためにもいじめは生じる。土日に溜まった勉強やスポーツのストレスを学校でぶつけたり、家庭不和のストレスをぶつけたりする。また生活全般に対するつまらなさや不満から他者を遊び感覚でいじめることもある。

では、そのいじめが生じた時に我々はどのように解決へと導くであろうか。多くは被害者を守り、加害者を罰し、形ばかりの仲直りをさせて終了という手段をとりがちであろう。しかしここに多くの問題がある。いじめの4層構造を鑑みれば、被害者と加害者の間だけの問題ではないし、傍観者や促進者の存在も鍵となる。この4者の関係を理解するためには『ドラえもん』を例に出すとわかりやすいだろう。被害(のび太)、加害者(ジャイアン)の外側には促進者(スネ夫)と傍観者(シズカ)が存在する。ジャイアンがのび太を殴る時、スネ夫は手を出さないがはやし立てるし、シズカは将来の旦那が助けを求めているのに無視するどころか笑う時もある。いじめが生じた時に「誰かに相談する」ということができないのは、それがのび太とジャイアンの2者間で生じているものではなくて、こうした1対3の構造を有していることも原因の1つであろう。のび太は周り全てが敵であると感じて誰にも相談できず、いじめが繰り返されることによって、自分に対する惨めな気持ちが高まり、やがて助けの差し伸べられてない無力感から「自分はいじめられて当然の存在ではないのか？」と自己否定を始めるかもしれない。そうなれば誰かに相談することが困難であることは自明であろう。したがってまずは、被害者のケアを第一に考えることが当然であるものの、いじめの問題を2者間に矮小化せず、生じている空間全体の問題することが不可欠となる⁷。

更に、ジャイアンを加害者とするいじめを終わらせるためにはのび太にドラえもんを与えるのではなく、ジャイアンにドラえもんを与える必要がある。のび太は確かに学業成績も悪く、学校で肯定される取り柄を持っていない。だが実際にはドラえもんがいなくても、優しい両親の下でのんびりと生活することができる。しかしジャイアンは、小学校5年生にして店番を頼まれ、母は妹を溺愛し、言うことを聞かなければ殴られる。これこそ児童労働かつ虐待であろう。それでも「か

あちゃーん」と要所で叫ぶジャイアンは母親の愛に飢えており、愛着障害であるかもしれない。加えて学業成績が良いわけではないのに、塾へ行くどころか、合田商店には定員を雇う余裕もないため店に立つジャイアンには十分な学習時間も環境も確保されていない。そして極めつけには、父も出現しない。ひょっとすると、ジャイアンの父は家あまり関与していないか、いないのかもしれない。そうであるならば、貧困の波がジャイアンにのしかかってきているのかもしれない。そして何よりも自分の好きな歌は誰も聞いてくれない。これではジャイアンが不満を持つのも当然であろう。

このように考えると、ジャイアンはスクールカーストでもそんなに高い位置にいる訳ではなく、実際には不満を抱えた現代社会の犠牲者であり、児相相談所の支援対象にもなる。事実ジャイアンはそうした不満を「ムシャクシャする」と表現し、自分の置かれている状況を認識しておらず、ストレスマネジメントができていない状況である。だからこそ、自分と同じく成績の悪いのび太が目につくし、逆に成績が悪いにも拘らず平和そうに生活しているのび太の存在は妬みや羨望の対象になるのかもしれない。人間の嫉妬は、自分がやりたくてもできないことや、関心のある方向へ向いてしまう。だがそのジャイアンの下にドラえもんがいたらどうだろうか。お手伝いロボットや、歌を上手くする道具があれば、たちまち彼の自己肯定感は満たされるだろう。お金があれば、ボーカルスクールに通えるし、塾にも行けるし、店番をする必要も無い。翻って言えば、いじめや荒れはジャイアンからのSOSであるとも捉えられる。いじめをしてしまうことは褒められたことではないが、してしまう原因に目を向ければ、ジャイアンを叱って終わりにはできない。むしろ、不満を募らせたジャイアンは自殺してしまう恐れもある。つまりジャイアンも支援対象なのである。

2-3 ドラえもんを基にしたいじめの対応策

しかし実際のいじめではドラえもんもいなければ、秘密道具も無い。指導員にできることはジャイアンを気遣い、理解し、ジャイアンの不満を軽減できるよう、彼が活躍できる場を設定することだけである。そしてそのヒントがドラえもんの映画にある。

映画ではジャイアンとのび太はとても仲がいい。ジャイアンはリーダー的な存在になり、のび太はそのジャイアンのパートナーとして活躍する。それは、映画では日常と異なる多様な価値観で互いを見ているため、普段は気にしない相手の良さに気付くことができるからだ。また非日常であるため、テストや親をはじめとする普段感じている日常の閉塞感や、ストレスを感じずに伸び伸びと生活できる。いわゆるお祭りの状態で

ある。例えば、日常では他者を怖がらせるジャイアン
の暴力も、映画でなら武器になるし、下手な歌も相手
をひるませるためには有効である。また、のび太はブ
ロ並みの射的の腕前を持っており、思いやりがあつて
優しい。そののび太の心優しさは、映画において仲間
達を度々感動させたり、射的の腕は仲間を助ける。つ
まり日常の学校生活では何の役にも立たないものも、
状況が変われば有用なものへと変化する。そうした一
元的な既存の価値観を転換するで、彼らの自己肯定感
も高まるだろう。ひょっとすると、映画では出木杉君
が役に立たない可能性さえある。そうすると、彼らは
互いに普段とは違う自分で普段とは違う友人達に出会
うことになる。そのようにリラックスして自己肯定感
が高まった状況で、互いの意外な一面を知り、出会い
直しをする。すると、映画でののび太とジャイアン
のように信頼関係で結ばれた仲間になることができる。
また日常であれば、テストの点数をはじめとする自己
肯定感を下げる個別の要因に自分独りで立ち向かうた
め、周囲の人間を貶めることで自己肯定感の回復を図
っていたが、映画では独りで行動しても解決しないた
め仲間との団結を余儀なくされる。日常の外側に、大
きな敵がいることも、彼らの団結力を高める要素にな
っているのかもしれない。

翻って考えれば、いじめは固定化した人間関係と変
わらない日常のなかで不満や閉塞感を持った者が存在
し、その者が自分の不満だけを解消しようとするとし
生じるのだろう。そしてそういった子ども達を分断し、
孤独な状態で不満を持たせる環境を作り出しているの
が、競争を子ども達に煽る学校や社会なのである。既
述の通り、のび太はブロ並みの射的の腕と、それに加
えてあやとりの技能を持っている。これらは評価でき
る特技である。しかし、先生はそういったのび太の特
技に目を向けることはなく、テストの得点が悪いのび
太を否定し、出木杉君を頂点としたテストで測れる学
力のみで生徒を評価するスクールカーストの再生産に
加担している。そうした教師側の意識が、テストの得
点の取れない生徒は価値のない人間というヒデユンカ
リキュラムを生み出し、のび太を被害者に貶めている
と考えられよう。例えば、逆に、のび太が中学へ行き
クレー射撃部等に入部したり、ハイパーヨーヨーと同
様にあやとりの世界大会なるものが開催されたりした
らどうだろう。瞬く間に彼はヒーローになり、世間は
掌を返すだろう。そうなれば、ジャイアンものび太に
嫉妬こそすれど、悪く言えなくなるかもしれない。の
び太に手を出せば、自分が悪者になる。教師が、のび
太のいいところ、出木杉君のダメなところが目立つよ
う様々な非日常を作り出してスクールカーストを崩壊
させ、ジャイアンも含め全員が認められる教室空間が

形成されれば、いじめの予防策となろう。つまりいじ
めの4層構造の外側にある、教師の狭くて一元的な価
値観という5層目の構造を変換することが必要となる。

そしてその折に重要なことは、プロセスを評価する
という点である。特に教師や指導員を含め、大人や社
会は現代の子どもに対して結果を求めがちであるが、
幼い頃から競争に晒されることで、子どもは失敗を恐
れて積極的な行動できなくなってしまう⁸。そしてこ
こまでの話を学童保育実践に変換すれば、行事や係活
動、集団遊びが、非日常⁹に該当するだろう。むしろ、
学童保育自体が子ども達にとっては非日常、つまり学
校とは違う空間であろう。そのような場所や場面では、
子ども達が取り組む活動のプロセスでどれだけ本気で
取り組めたか、話し合いや意見の衝突のなかで関係性
の改善があったかに重きを置く必要がある。そうす
ることで、体験の充実度が上がり、友人とのつながりが
形成され、結果が悪くても自らの生きた経験になろう。
逆に、結果ばかりを気にして他者に合わせ、楽しいフ
リをしているようでは、その場所は居心地よく感じら
れない。仮に集団遊び等で競争があっても、多様な価
値観によって自らが認められていると感じられる場所
は、子どもにとって居場所となりえよう。失敗しても
いい、自分は認められている、と一人ひとりが感じら
れることが重要になってくる。そのために、当事者の
話をしっかりと傾聴し、この指導員は味方であると認
識させ、信頼関係を築いたうえで、その子にスポット
が当たるような非日常を意図的に用意し、役割を与
えるべきだろう。ジャイアンならカラオケ、のび太なら
射的など、当事者が熱中できるものが良いだろう。実
際に、物静かな子が花壇の水やりをよくやっていて、
その子を活かすために花壇の鉢植えの入れ替え作業を
する時に、その子をリーダーに任命した実践例もある。
つまり、活動ありきではなくて、子どもありきで活動
を計画することが鍵になる。一般に、行事ごとは予め
決まった年間スケジュールの消化になりがちであるが、
子ども達に何が必要かという視点で再構成し、子ども
達の声を活かしながら取捨選択することが望ましい。
極端な例だが、子ども達が望むなら、通例でやってい
ることを無しにして、やりたいことを何度もやっても
いいだろう。

このように捉えると現代のいじめ対応は基本的に対
処療法であり、本来必要なのはこうした予防策である
ことがわかるだろう。いじめを起こす子どもは困らせ
る子ではあるが、その子もまた困っている子である。
そうしたジャイアンが指導員に辛く当たるのも、学童
で荒れるのも、彼らからのSOSであると認識し、彼ら
を受け止め、彼らの話を聞き、彼らを認め、そして彼
らにとって居心地のよい空間を作ることでいじめを防

止することができる。そしてそのためにも、実はジャイアンに対してアプローチして必要もある。なぜならば、荒れる原因の1つには、既述の通り家庭環境があるからだ。

3、講義内容（虐待について）

3-1 虐待の要因

後半では、虐待について、いじめとの関連性も含めて講義を行った。引き続き、ドラえもんを例に考えてみたい。端的に言えば、ジャイアンがのび太をいじめ理由と同じ構造で、ストレスを溜めたジャイアンの母もジャイアンを殴っていると表現できよう。

既述の通り、暴力の背景には自己肯定感の低さや、満たされなさがある。小学校5年生の息子を店番にするような合田商店が、まがりなりにも儲かっているとは考えづらい。また野比家は庭付き一戸建てであるが、合田家の1階は店舗であり生活スペースは狭く、庭も無い。加えて、夫の存在も疑わしい。自らと他人を比べ、家計と子育ての責任を一手に引き受けた母がストレスを溜める。そして募らせた不満は母としてのゆとりを失わせ、通常であるならば寛容に受け止められる物事も受容できなくさせてしまう。したがってジャイアンに辛く当たってしまうことも必然であろう。そしてそれは母だけでなく、社会で疲弊して帰宅する父も同様である。会社や人間関係でのストレスや満たされなさを家庭に持ち込んで子どもに当たってしまうこともある。高所得層の親が、理想の子どもに育たない我が子を虐待することもある。このように貧困から起因する生活苦同様に、虐待の根幹には自己肯定感の低さや、満たされなさがあり「自分より立場が下だ」「こいつなら服従させられる」と相手に対して攻撃することで、自らの有能さを立証しようというメカニズムが存在していることはいじめと同様である。かつてであれば地域村落共同体や大家族によって担われていた子育ては、現代では核家族化の進行によって家庭のみに丸投げされた。人との繋がりが無い状態で個人化した親達もまた社会からの圧力により苦しんでいる。そのような援助や他者の目が無い状況では、いじめ同様に虐待だけが自己肯定感を高める唯一の方法になってしまい、虐待対象への執着もいっそう高まってしまふ¹⁰。ここには、アルコール依存等と同じような嗜癖というメカニズムが存在する。アルコールを取り上げられたアル中患者と同じく、禁断症状が起こるように、欠乏した部分を満たしてくれるものを過度に求める。いわゆるアディクションと呼ばれる行動¹¹である。

他方で、虐待をする親もまた虐待を受けて育ったり、愛着障害であったりするため、どう子どもに接すればいいのかかわからず、結果虐待の再生産をしてしまうこ

ともある¹²。そもそも虐待を受けて育った子どもは、幼少期最も愛されるべき他者の筆頭である両親から無条件の受容をされず否定されながら育ったため、人格の根幹に安定した土台や、後の自分を形成していくための経験を貯め込んでいく器が形成されていない。したがって自らを肯定することが難しく、感情が不安定になりやすい。例えば、幼稚園の入口でよく見る子どもが泣く光景を考えるとわかりやすい。子ども達は親と離れるという慣れない不安から泣いている。しかし、そのうち「親はちゃんと自分を迎えに来てくれる。離れていても親に愛されている」と実感できるようになると泣かなくなる。つまり、安定した愛情の土台が形成されることで気持ちが安定し、過度に親との接触を求める必要がなくなる。愛着障害には抑制型（傷つきたくないがために人との関わりを嫌う人々）と脱抑制型（寂しさから過剰な繋がりを欲しがらる人々）の2タイプがあり、どちらも自己防衛本能から生じている。そのため、その回復には容易なことではないが、親の愛情に変わる何かの存在や、人間関係における信頼感が不可欠となる。

3-2 クレヨンしんちゃんを基にした虐待への対応

したがってここまでの流れを確認すれば、虐待が疑われた場合、子どもを即刻保護しなければならないこと、そして愛着障害等でパーソナルスペースに違和感を覚える子どもの家庭状況を疑うことは当然であるが、それだけでなく、虐待を起こしてしまう親に対してもアプローチする必要がある。なぜならば、親そのものも現代社会の犠牲者であるからだ。

ここで虐待への対処を考えるために『クレヨンしんちゃん』を例にしてみたい。現代ではサザエさん型からクレヨンしんちゃん型の家族モデルへの変化があり、子育ての責任は親にのしかかる。そんななか、みさえは時折しんのすけを殴ることがあり、これは児童虐待防止法上では虐待の定義に該当する。だが、それがエスカレートしないのはひろしが度々みさえを宥めるからであり、仮に、ひろしがしんのすけを虐待することがあっても、みさえとひろしの関係性であれば、みさえはひろしを止めるだろう。これが経済的問題や愛着障害、DV等によって、どちらかが一方に従属的な関係を強いられていると虐待に歯止めはかからなくなる。したがって虐待を防ぐ根幹にはまず良好かつ平等な夫婦関係が必要となることがわかる。

いじめと同じく、虐待も自分よりもヒエラルキーが低いと認識されている方向へ暴力が向く。ひろしが溜めたストレスはみさえに向き、みさえのストレスはしんのすけに向く。そしてしんのすけのストレスが溜まると、シロの餌を忘れたり、シロに当たったりするだ

ろう。シロをはけ口にすることによってしんのすけはストレスを解消するだろうが、シロが虐待死すれば、次に犠牲になるのはしんのすけであろう。ひょっとすると下手にシロや、ましてひまわりに手を出そうものなら、みさえに咎められる可能性もあり、最初に犠牲になるのはしんのすけの可能性もある。ただ、この物語で虐待が過度にならないのは、みさえの親友おケイの存在から起因するところが大きい。みさえはおケイと話し込むと、時間を忘れるほど仲が良く、何でも話せる存在であり、彼女の存在がみさえのストレスを軽減していると見受けられる。しかし、例えばジャイアン之母にはそういう友人はいるのだろうか。そして夫との関係は良好なのだろうか。しかも現代の日本では離婚率が3組に1組となり、シングルマザーやシングルファザーが増加している。良好な夫婦関係以前にパートナーや相談相手がいないこともある。核家族化、そして未婚化した現代の家族の様相では第三者もおらず、カプセル化して視野が狭小化し、嗜癖対象との共依依存状態になる可能性も高い。

そこで指導員ができることは、ジャイアン之母のおケイになること、もしくはおケイを見つけることである。指導員はメディアである。媒介となり、子ども達の間をつなぐことでいじめの予防をすることは既述したが、それは家庭においても同様であろう。指導員は、よく保護者に対して、子どもを褒めたり、子どもの直してほしい個所を一方的に伝えたりしがちである。しかし親とて人間あり、個人である。指導員が親に対して一方的に話したり、出来事を伝えたりするだけでは、親と指導員という単なる業務上での連絡をしているに過ぎない。そうではなく、親が子育てに対して頑張っていること、親の子育ての大変さを聞きながら、親としてだけでなく、親を個人として承認することで業務上の関係を越えた信頼関係を作れるようになる。親のなかには、親になった途端「〇〇のお母さん、お父さん」と呼ばれ、個人としての承認を欲しがっている者も存在している。つまり「〇〇さんは××なんですよ？」「お仕事大変ですか？」といった質問を皮切りに、親の個人としての社会上の困難を傾聴しつつ、愚痴の言い合える関係性を築く必要がある。そしてそうした親達を学童での行事を通じて繋げていく。つまり、学童での非日常は、子どもだけではなく親にとっても出会いの場となる。のび太とジャイアンが映画では共同の目的のために共闘するが、実際に日常生活でも、彼らの抱える厄介事はお互いではなく、先生や、親や社会である。そして親の子育てにおいても、厄介事はむしろ子どもではなく社会である。親同士に仲間意識が芽生え、支え合い、親の生活が充実すれば、自然に子どもへのゆとりも出てくるだろう。

また、親同士のつながりに限らず、児童相談所を活用するのもよいだろう。児童相談所は、虐待を起こす親から子どもを保護するだけではない。一般的な親や、虐待を起こす親にとっては負のイメージを抱きがちであるが、子育ての相談を受けることも仕事である¹³。したがって、指導員はそうした第三機関を活用しながら、家庭だけに子育てを収斂させず、誰かに相談できる環境を作ることで虐待の防止や対応が可能になるだろう。そうした責任の移譲は、指導員が責務を丸抱えしてバーンアウトすることを防止するためにも必要になる。いずれにせよ、仮に指導員がその地域から移動したとしても、永続的に存在する支援を確保するために、そして親が自律的に子育てできるように、様々なつながりを作ることが必要となるだろう。そうすることで、場合によっては虐待やDVをするパートナーと離婚するといった選択も可能になってくるだろう。したがって家庭を孤立させないことが、1番の対応となりえよう。

4、おわりに

本稿では学童保育指導に対する「いじめや虐待への対応」に関する講習の内容を示してきた。講習のサブタイトルとして「貧困、現代社会、学校の様相から」ということを意識して構成し、主に経済面や社会面での変容が根幹にあることを基にこうした変化について講習を行った。そしてだからこそ、いじめや虐待は起きうるし、誰もがジャイアンになる可能性があるということ認識する必要がある。実際にドラえもん映画『のび太と日本誕生』の冒頭では、語学系の塾や習い事の増加に苦しむスネ夫、バイオリンやピアノの演奏曲を母に勝手に決められるシズカの姿が描かれており、スネ夫はエリートクラスのストレス、シズカは母子カプセルに近い親からの支配によるストレスがあると解釈できる。仮に、ジャイアンが救われても、今度はスネ夫とシズカがいじめを行う可能性もある。いじめを起こす子どもは、家庭や学校生活のどこかに課題を抱えているため、それを解決していくことが根本的な対応となるだろう。

したがって重要視すべきは、こうした状況に対して、誰かを悪者にするのではなく、当事者を保護しながら、当事者と共に彼らを取り巻く状況にどう対処していくかということである。そしてそのような経験こそ、当事者が自らと社会を見つめ直し、これからの社会を生きるための糧となりえよう。学童保育実践とは、異年齢集団での交流を活用することで、かつて共同体で担われていた子育てが家庭だけに丸投げだった現代において、そうした共同体や子ども達の居場所を地域の中に復活させていくものではないだろうか。サザエ

さん型の拡大家族は、なかなか現代では存在しない。確かに、波平とマスオにとって互いの存在は収入を支えるうでも、心強い。カツオにとってもマスオの存在は、タラちゃんにとってもカツオの存在は大きいし、そしてサザエとマスオの子育てにとってフネ、波平、カツオ、ワカメの存在は大きい。そしてノリスケ達との交流も、全員にとって肯定的な効果が見込まれる。だが、そうした古き良きもの変わるつながりを、異年齢集団での交流を活用することで、現代で生み出していくことが虐待の予防は当然のことながら、いじめの防止にも繋がる。ジャイアン之母がジャイアンに優しければ、ジャイアンがムシャクシャすることも無い。

そのためにも指導員自身が根本的に心がけるべきことは、自身のドラえもんを確保するということだ。いじめや虐待の対応に当たる折には、ある程度当事者の思いを受け止める必要がある。そしてそれはとても大変な感情労働である。だからこそ、指導主体となる指導員が不安定な状況では適切な対応はできない。指導員の労働環境や、指導員間でのチームワーク、そして生活者としての指導員の時間を充実させ、指導員のQOLを上げることが、実際にはいじめや虐待の対応のための第一歩なのかもしれない。

参考文献

阿部彩 (2008). 子どもの貧困—日本の不公平を考える. 岩波新書.

A. ギデンズ (1995). 松尾精文, 松川昭子訳. 親密性の 変容—近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム—. 而立書房.

A. ギデンズ, U. ベック, S. ラッシュ (1997). 松尾精文, 小幡正敏, 叶堂隆三訳. 再帰的近代化—近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理—. 而立書房.

A. ギデンズ (2005). 秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳. モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会—. ハーベスト社.

岡田尊司 (2011). 愛着障害 子ども時代を引きずる人々. 光文社新書.

G. ビースタ (2016). 藤井啓之, 玉木博章訳. よい教育とはなにか—倫理・政治・民主主義. 白澤社.

学童保育指導員研修テキスト編集委員会 (2013). 学童保育指導員のための研修テキスト. かもがわ出版.

Z. Bauman (1993). *Postmodern Ethics*. Blackwell.

Z. バウマン (2001). 森田典正訳, リキッド・モダニティ—液状化する社会—. 大月書店.

Z. バウマン (2002). 中道寿一訳. 政治の発見. 日本経済評論社.

Z. バウマン (2007). 伊藤茂訳. アイデンティティ. 日本経済評論社.

Z. バウマン (2007). 奥井智之訳. コミュニティ—安全と自由の戦場. 筑摩書房.

Z. バウマン (2008). 長谷川啓介訳. リキッドライフ—現代における生の諸相. 大月書店.

児童虐待問題研究会 (2018). 全訂 Q&A 児童虐待防止ハンドブック. ぎょうせい.

J. デューイ (2004). 市村尚久訳. 経験と教育. 講談社学術文庫.

鈴木翔 (2012). 教室内 (スクール) カースト. 光文社新書.

玉木博章 (2017). 「振り返り」活動の指導に関する考察 (1) —特別活動実践における重要性と道徳性の観点から—中京大学国際教養学部. 中京大学教師教育論叢. 第7巻. 49-64.

玉木博章 (2018). 学校教育の商品化による教育実践の変化に関する考察—特別活動における道徳性の側面から—. 名古屋経済大学. 教職支援室報, Vol. 1, No. 1. 45-53.

玉木博章. 学童保育の商品化による指導員像の変化に関する試論—職員のチームワークとキャリア形成の観点から—. 名古屋経済大学. 教職支援室報, Vol. 1, No. 1. 55-61. (2018)

土井隆義 (2008). 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル—. ちくま新書.

土井隆義 (2008). キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像—. 岩波書店.

内藤朝雄 (2001). いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体. 柏書房.

内藤朝雄 (2007). 〈いじめ学〉の時代. 柏書房.

仲島正教 (2017). 運動会の思い出—「過程」から感動は生まれる. 体育科教育, 2017年5月号. 大修館書店. 26-29.

藤井啓之 (2016). 訳者解説—ピースタを通して見る日本の教育風景. G. ビースタ著. 藤井啓之, 玉木博章訳. よい教育とはなにか—倫理・政治・民主主義. 白澤社. 199-205.

藤井啓之 (2016). 表情を持ち始めた中学生—仮面がなくても居られる学校に—. 生活指導, 724号. 高文研. 38-41.

藤井啓之 (2017). PDCA から PDSA へ—教師にも子どもにも表情のある教育を—. 教育科学研究会編集. 教育, 2017年, 2月号. かもがわ出版. 59-64.

藤井啓之 (2018). ツルンとした世界のなかの「家なき子」子どもたちにホームをつくりだす. 教育科学研究会編集. 教育, 2018年, 9月号. かもがわ出版. 5-12.

本田由紀 (2005). 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで. NTT 出版.

保坂渉, 池谷孝司. 子どもの貧困連鎖. 新潮社. (2015)
 松下良平(2011). 道徳教育はホントに道徳的か? 「生きづらさ」の背景を探る. 日本図書センター.
 山下政俊, 湯浅恭正(2012). 新しい時代の教育方法. ミネルヴァ書房.
 山本敏郎, 藤井啓之. 高橋英児, 福田敦志 (2014).

¹ そもそも平均値は、1つでも高い値が入ってくると劇的に上昇する。具体的には、会場に大企業の社長が訪れれば所得平均はぐっと上昇するが、おそらく我々はその平均以下の所得しか得られていないという点、つまり一部の富裕層が平均値を上昇させ、実際には多くの貧困者がいるのではないかと、そしてそれを明らかにするために平均値と中央値を比較する必要があるということを示した。

² もちろん貧困層の子どもにとっては、毎日の衣類の心配をしなくていい点はメリットである。

³ 筆者が勤務していた医学部専門予備校は年間授業料が約 1000 万円。そこに中学生の頃から通い、合格できなければ当然浪人する。そして夜は高級車で親が生徒を迎えが来る。結果6浪の末に、ようやく医学部に合格しても、遊びたいがため、すぐに大学へ行かなくなる学生もいた。

⁴ 休みの過ごし方、面白いと思うこと、家族行事も家庭によって異なる。

⁵ 小学校入学時での1年の発達差は4月生まれと3月生まれでは、人生の1/6 違うことになるので相当大きい。4月生まれは自然に成功体験を積み重ねることが可能であり、自己肯定感を高め、何事にも前向きに挑戦していく傾向にある。反面3月生まれは比較的的成功体験を積み重ねづらく、自然に自己肯定感を下げ、物事に対して消極的になりやすいという見解もある。

⁶ このことに関連して藤井啓之は、厚生労働省の2018年の『自殺対策白書』の年齢階級別自殺者を引合いに出しながら、15～39歳での死因の割合において自殺が1位であり、またその数値はWHOのデータに基づいた国際比較でも他の先進国の多くは日本の半分だと指摘する。またそのことから、日本社会がとりわけ子どもや若者にとって生きづらい社会であることが見て取れる(藤井 2018, 5-6)と警鐘を鳴らす。

⁷ このことに関連して「いじめられる側にも落ち度がある」との意見を持つ者が一定数存在するが、「いじめは許されない行為であり、被害者には何の落ち度

新しい時代の生活指導. 有斐閣アルマ.

横山泰行 (2005). ドラえもん学. PHP 新書.

和田一郎 (2016). 児童相談所一時保護所の子どもと支援—子どもへのケアから行政評価まで. 明石書店.

注)

もない」という姿勢を貫きながら、凶悪な案件の場合を除いては加害者も切り捨てることなくケアすることが重要になる。いじめは被害者が悪いわけではなく、加害者にいじめをさせしめる環境の問題でもある。

⁸ 逆にワールドカップで日本が敗北したベルギーでは、日本で言う中学生を過ぎるくらいの年齢に達するまでは勝利至上主義に走る指導をしてはいけないことになっているが、このことが強さの秘訣であるとも考えられよう。

⁹ まとめるといじめは、①固定化された人間関係と、②変わらない日常のなかで、③一元的価値観で判断されること、によるストレスや不満を解消するために、他者を攻撃することで自己の優位性を示そうとする人物がいると生じうる。

¹⁰ このことが児童相談所に保護された児童を、虐待をする親が過剰に取り返そうとする要因である。

¹¹ アディクションには様々あり、アルコール、タバコ、暴力(虐待)、ピアスといったアクティングアウトや、リストカット(自傷)、オーバードーズ、不登校といったアクティングインや、セックス、買い物(浪費)、過度な人間関係もこれに該当する。

¹² 実際に筆者の親戚もそうであった。ネグレクト気味に育ったため、子どもの接し方がわからず「親になれない」という理由で3人の子ども達を置いて離婚した。ただそのご両親は「そんなことはなかった」と言い、どれだけ親が子どもを愛して尽くしていたとしても、それをどう受け取るかは子ども次第であるという親子間での行き違いが、次なる不幸を生む点に子育ての難しさがある。

¹³ ただ現在の児童相談所には、子どもに関する専門的な知見を有するスタッフが少なく、公務員の、いち移動先になっている点が最大の課題である。したがって今後は、そうした専門知識や資格を持つ職員を別枠で採用することも課題であるし、またそもそも人員や施設も不足も解決すべき課題である。